

## 座談会を終えて

井本博之 臨床文藝医学会理事長、家庭医

私のような内科出身の医師は経験が乏しく、読書から得た知識は地に足がつかない。臨床経験豊富な精神科医との対話は、実りの多いありがたい機会だった。座談会前にたまたまバリントを読んでいたのだが、悪性退行が現代の複雑性PTSDにもつながっていくと知ったのは大きな収穫である。バリントは、フロイトの時よりも症例が積み上がり、その中でも困難な症例から新たな病態を見出した。同様に、高木さん、高さんの時代にもまだ命名できない難しい症例が積み上がり新たな名前が生まれたという。あたかも系統樹が進化する様を間近で垣間見たようで大変に面白い。しかし、それをめんどくさくて診たくない患者に対するレッテル貼りにははいけないという高さんのご指摘には、背筋が伸びる思いがした。

座談会ではリベットの実験に関する中井の言及が話題にのぼった。私としては、この踏み越えに対する論考が、自由意志云々はともかく、知情意ではなく情知意であるという順序で文章が終えられていることに注目したい。

知や意は情の大海の上に浮かぶ船、中に泳ぐ魚に過ぎないということであろう。(中井久夫、「『踏み越え』について」、『傲候・記憶・外傷』、みすず書房、2004.)

我々に自由意志はあるのか、あるいは全ては決定されているのか、については興味が尽きぬが、一方で栓のないことであろうという諦めもある。形相と質料のどちらが優位であるか、と同様の永い永い議論と同様に決着のつかぬことだろう。

バリントによると、分析治療における2大因子は解釈と対象関係である。これは言語の2つの機能(情報と情緒)にそのまま対応している。解釈は情報で、対象関係は情緒的なものである。人は誰かに話すとき(あるいは誰かに書くときも)、情報を伝える以外に、情緒的な交流をしている。モノログでなければ。

フロイトの患者は、解釈という成人言語を受け入れられる患者のみであったという。バリントは、解釈だけでは治療できない基底欠損領域を見出した。そこでは、最小限二人の間の相互作用である対象関係が重要となる。

ちなみに、バリントは対象関係を大切にするなら、力動概念に終始する一次心理学の外に出て、特定の患者と特定の分析者との相互作用が生じる二人心理学をと述べている。これらの厳密な意味は知らないが、モノログからダイアログ

へという転換を連想させておもしろい。キレキレの解釈も目の前の患者との関係に活かされなければ、一人相撲の独白に過ぎぬという皮肉であろうか。

いずれにせよ、バリントは（力動概念を用いた）解釈だけでなく、関係性も重要と世に問い、新たな病態といかに向き合うかを導き出した。

これまで言語的世界に縛り付けられてきた力動概念は、生物としての人間の確かな身体と物理的環境の中に据え直される。（中略）人間の欲動は、共生の可能性を基礎づける「関係への希求」によって置き換えられる。

（高木俊介. 21世紀の力動精神療法試論. 精神療法. 2019；45(4), 493-499.)

高木さんの「関係への希求」という問い立てはバリントの問いと地続きだと感じる。高木さんの日々の実践はその最前線に違いない。そして、精神科出身ではない我々が、連綿と続く精神科の巨匠たちの問いのその最前線にて、歴史の目撃者として、あるいは教えを乞う門下生として、臨床に参加できているというのはなんたる僥倖であろうか（高木さんのもとで我々も ACT-K に参加しているが、高木さんは内科出身の我々を鑄直すために毎月精神医療の読書会を開催して下さっている）。今後、関係性の治療を地域でどのように花咲かせるかは、我々若手の双肩にもかかっており、楽しみで仕方

がない。この NPO 法人での活動もその一つである。機は熟した。準備はできている。

バリントと親交のあった土居健郎も、その症例をみれば、彼が単に解釈を伝えることを目的とした人物では全くなかったことがよくわかる。土居はよくキルケゴールを引用している。キルケゴールといえば、「自己とは、ひとつの関係、その関係それ自身に関係する関係である」と規定し、関係性の病理を説いた。両者ともキリスト者であった。中井も晩年にカトリックの洗礼を受けたことなどさまざまに連想がつながっていく。今後、情緒、関係性、信仰について考察を深めたい。

問いを深める実り多い機会となりました。高木さん、高さん、この場を借りて改めてお礼申し上げます。若輩の依頼を快諾くださり、誠にありがとうございます。